

丸橋忠彌

中山義秀



丸 橋 忠 彌

中 山 義 秀



ロマン・ブックス

昭和30年10月10日 第1刷発行

まる ぼし ちゆう や
丸橋忠彌

¥ 130

著 者 なか 中 やま 山 ぎ 義 しゆう 秀

発行者 野 間 省 一

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

東京都文京区関口町140

発行所 株式 大日本雄弁会講談社
会社

東京都文京区音羽町3の19

振替 東京 3930

電話 大塚 (94) 3101・3111・3121

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

(毛利製本)

目

次

寒紅梅……………三

浪人悲歌……………五

花咲く葭原……………元

浪人盃……………四

春色……………六

花の人……………九

たちね……………一〇八

流	狼	雲	青	草	水	亀
		起	葉	萌	の	
星	煙	る	の	え	上	虎
.....						
二〇八	一九三	一七八	一四四	一五〇	一五六	一三三

丸
橋
忠
彌

寒　　紅　　梅

赤坂・氷川神社の境内である。

神社は台地の上にたち、境内に松が多い。社殿の前や松樹の間に、桜や梅の花木がある。

桜の蕾はまだ堅いが、梅は今が見頃の七分咲。中に紅梅もまじっている。

寒があけて、季節はようやく、春めいてきた。曇り日で、風はないが、すこし薄寒い。

広い境内の中は、ひっそりとしている。参詣の人影も、見えない。

二人の武士が、街道沿いの裏門から、境内にはいつてきた。

一人は、六尺近い、大男である。黒縮緬ちりめんの紋服に、

なめしの革羽織、三尺もあろうかと思われる、朱鞘の
大刀に、小刀を添えて、落し差にしている。

革足袋に雪駄せうだをはいた、着流し姿だ。編笠のひさし
をあげて、境内の中を見回しながら、

「こりや、静かでよい。梅が咲いている。此処でしば
らく休み、梅見酒としやれてゆこうか、のう勘介」

彼がそう云つて、声をかけた相手は、まだ十七、八
歳の少年だ。若衆風に前髪をたて、丈の短い蝙蝠羽織
に、縞子袴、蛸鞘の大小をさし、右手に朱総のついた、
大瓢箪をさげている。

瓢箪には、酒が入っているらしい。少年はうなずい
て、頭をさげ、

「先生、それなれば、あちらの方が閑静で、一段と風
情がござりましょう」

「そうだな。向うへ回つてみようか」

社殿の向う側は、表門口にあたる。樹木に蔽われ
た、丘の高みにあるので、町家の街なみにつづく裏門
口よりは、一層奥深い感じがする。

大兵の武士は、少年をつれて社殿の前を通るのに、
編笠をとるところか、頭一つさげなかつた。

この男は、神信心などに、ちつとも氣をとめないものようだ。

しかし、神前を無造作に横ぎつて、向う側へ出ようとしたところで、彼はハタと足をとめた。

社殿の横手にあたる奥の方を、しばらくじつと窺っていたが、静かに編笠をとると、神前に拝礼している、少年の近づいてくるのを待つて、

「勘介、向うを見ろ」

と顎をしやくり、目顔で知らせる。勘介は何気なく、その方を見やつて、サツと顔色をかえた。

同時に五体も硬ばつてしまつたらしく、釘づけされたもののように、物も云わず、その場に立つている。

相手は、そういう少年の姿を、異様にぎらつく眼差して、鋭く見おろしながら、口許には反対に微笑をうかべ、

「やつとる、やつとる。一人で六人相手だ。梅見なぞおけ、こつちの方が、よつぽど面白い観物だぞ。勘介、後学のためだ。も、そつと近寄つて、とつくと見学したがい」

をとりかこみ、拔身をかまえている。

いずれも、袴の股立はとつているが、襷も鉢巻もしていないところから察すると、とつさに持上つた争い事のような。

それとも何かの犯人か科人とがにんを、此処へ追込んできたものであるか。

相手の男は、彼等の蔭にかくれて、よく分らない。

大兵の武士は、ぬいだ編笠を片手に、恐れる風もなく現場に近づいて行つた。

少年は、彼の後について行くこうにも、足が動かないらしく、社殿をめぐる築土の塀の角にとりついて、顫えていた。

しかし、さすがに逃げだすようなことはなく、両眼をつりあげ息をこらして、瞬きもせず、争いの場を見つめている。

現場に近寄つていつた武士は、身長があるので、取囲んだ人々の背越しに、たやすく相手の男を認めることができた。

意外に、小柄な男である。月代を大きくとり、鬚の

る。

いわゆる、大額というやつだ。伊達者や、六法男の風体である。

身なりもそれにふさわしく、膝の上に着物の裾のはねあがつた、丈の短い、広袖の綿入を、素肌一枚きただけ。

六尺帯を二重にまわして、左横に結び、身の丈よりも長いかわられる、無反りの剛刀を、横手上段にふりかぶりながら、松の大樹を後に、前後の敵を睨んでたちはだかつている。

争闘はもう、どれくらい長く、続いているのである。

囲んでいる人々も、囲まれている男も、共に顔に血の気がない。

さらした布を見るように、まっ白に乾いている。

かわりに、息づかいがせわしかつた。とぎれとぎれの息の音は、聞えてこないが、上下に波うつ肩の喘ぎで、それと察しられる。

前にむかつた若侍四人、いずれも横鬘や肩や腕に、薄手、浅手を負うていた。

飛びかかつてゆく度、相手の長刀で、横なぐりにやられたものである。

血は見えないが、衣服の裂けている工合で、疵の程度がわかる。

大額の男も、傷をおうていた。額、頬、手のこぶしなどから、血が流れしたたつている。

しかし、深傷は一つもない。松の幹を後楯にして、飛込んでくる者を斬り、払つては飛びすさり、決して松の根方から、離れないためである。

背後にまわつた二人の若侍も、これではいかんとも仕様があらまい。

ともかくも、一人で六人を相手に闘いながら、すこしも屈しないところは、術に達し胆のすわつた、よほどの豪の者と思われる。

先生と呼ばれている、大兵の武士が、現場へ近づいてきた時、大額の男も六人の若侍達も、極度の緊張を、つづけてきたあまり、雙方へとへとになっていた。

この上争闘がながびけば、彼等はそのまま、息絶えてしまつたかも知れない。

最早どちらからも、仕掛けてゆく力はなく、石のよ

うに全身を硬直させて、今にも絶入りそうな喘ぎを、わずかにハッハッと洩らしているにすぎなかつた。

まだ傷をおわず、松樹の蔭に、敵の隙を狙つていた、二人の若侍は、前方から近づいてくる、武士の大きな姿が、チラと眼にうつると、敵の仲間が、助勢に駆けつけてきたと、勘違いしたらしく、恐怖の色を、面に走らせながら、

「あッ」

と叫ぶ間もなく、いきなり彼方へ逃げだした。

その行先きには、台地の坂を下る、脇道があつた。其処へ向つて、こけつまろびつ、無二無三に逃げてゆく。

今迄、堪えにこらえていた恐怖の念が、この際になつて、一時に爆発したものであらう。

すると、正面に敵と相對していた、四人の仲間も、やにわに刀をひいて、二人の跡を追つた。

何事かは知らないが、思わず二人の逃走に、ひつぱられたような恰好である。

彼等もまた、その上の緊張に、耐えきれなくなつていたのだ。

相手方が、逃げだしたのを見ると、大額の男は、後を追いかけようとして、何かに躓いたように、ばたと前に倒れた。

それなり、じつとして動かない。息がぎれて、昏絶したのである。

大兵の武士が、彼の背中に、活を入れようとして、側へよつた瞬間、男はなかば無意識に、飛びおきるなり、彼に斬りかかつた。

無意識のうちにも、敵を仆そうという、凄まじい闘争心である。

武士は身をかかわして、前に流れる相手の利き腕を、しつかと押え、

「人違いめさるな。相手方はみな、逃げてござる」
割れるような、大声である。夢中の相手を、正氣づかせるためであらう。

大額の男は、血走つた眼で、武士の顔をみあげた。色の黒い、顎の張つた、たくましい顔つきだ。相手をじつと、見まもつてゐる眼底に、稲妻に似た閃きがある。

人違いだとわかると、大額の男はふたたびがつくり

となつた。

全身の力という力が、尽きはててしまつたように、口が利けず、起つてゐる力もない。

大兵の武士は、彼の半身をだきかかえて、背後をふりかえると、少年を呼んだ。

「おうい、勘介、駕籠を、よんでまいれ」

勘介はうなずくと、すぐに駈けだした。

大額の男は、芝の源助町に住んでいた。二階建の町家で、品川の海岸通りにあつた。

駕籠でそこへ送りこみ、手当をくわえると、すぐ元氣になつた。

疵はみな浅手で、たいしたことはない。

彼は医療をすますと、衣服をあらためて、送つてきてくれた武士と少年を、品川の海を見渡す、二階座敷に案内した。

家内に同居しているらしい、数人の若者達の手で、つぎつぎと酒肴の膳が、はこばれてくる。

主人は武士の前に両手をついて、丁重に礼をのべた。

「相手方の者を、一人も仕留めずに、傷をおうばかり

か、氣絶など致し、まことにお恥ずかしき様を、御覽にいれました」

その物腰といい、言葉遣いといい、大額の六法風に似もやらず、きちんとしている。

大兵の武士は、彼をなぐさめて、

「いや、お一人で六人の武士を相手に、一段のお働き。そのうち四人まで、傷を負わしめられたは、拙者がたしかに、見届け申しました。常人には、ならぬ御振舞感服仕つてござる」

相手は、頭をかき、

「ともあれ、このままでは、手前の顔がたちませぬ。明日にもかしこに札を建て、再勝負を申込むつもりであります」

武士は彼の強情を、面白がりながら、

「かの者共は、いずこの家中の士でござる」

「名は知りませぬが、酒井讃州の家臣に、間違いはありません」

「ほほう、今をときめく柳營の大老家臣に讃岐守忠勝殿の御家中とな」

「それを承知で、喧嘩を売りました」

「酒井家に何か、意趣あつてのことでござるか」

「酒井にかぎらず、將軍家を笠にきて威張りちらす、幕臣共の面つきからして、まず氣に入りますね、ははははは」

彼はあたりを憚りもせず、思つたことをはつきりと云う。將軍のお膝元もおそれぬ、不敵さである。

相手の武士は、我が意をえたという風にうなずいて、「失礼ながら其許は、根からの町人ではござるまい。

差支えなくば、お身許をお明し下され」

そう問われて主人は苦笑に似た、わらいを洩らし、

「明すほどの身許でもありませんが、手前はもと加藤肥後守の家中。寛永九年六月、主家改易となり、浪人して以来はや十余年、世過ぎのため町人となつて、人入れ稼業を致しております」

「なるほど、それで先き程のお働きも、納得がいきました。思えば加藤忠広殿御父子も、お氣の毒なことで御座つたな。いわば罪なきに、五十二万石を、ただ取上げられたも同然——」

「左様でござりまする」

主人は當時を、思いおこして、無念にたえないらし

く、

「当主忠広公の不行跡と、嗣子光正様の謀書一件を理由に、五十二万石の家中を、取潰したは、前に断絶させられた福島家と同じく、太閤取立の諸大名を、潰そうという、徳川の政策にすぎません」

「まつたく、埒もなき次第であつた由」

武士は、主人の言葉に、合槌をうつて、

「ところで、当主の不行跡と、嫡子の謀書の件は、いかなる仔細でござる」

「お聞き下されませ」

主人は武士の方へ、一膝乗出しながら、
「忠広公の御内室は、蒲生家の息女、家康の外孫にあたります。御夫婦仲が悪い上に、奥方が嫉妬深く、妾腹にできた殿の子供を、殺そうとなされた。そこでひそかに、肥後の国許へおくつて、隠しおかれたところ、人質を上断りなく、国へかえしたというので、殿の御行跡について、不審をこうむる、理由の一つになりました。」

また、嗣子光正様の謀書一件と申しますのは、寛永九年の正月、秀忠が亡くなつた折、世上なんとなく騒

がしく、時の権臣土井大炊頭利勝が、諸国主に廻状をまわして、謀叛を企てたという噂が、江戸中にひろがつた事がござります。

この大炊頭と親しい井上新左衛門という五百石の旗本が、忠広公のお屋敷へも出入りして、碁の相手をなされる。すると殿が戯れに新左衛門を、大炊頭一味の謀叛人謀叛人とよばれて、いつもからかわれた。

ところが、まだ十四、五歳前後の光正様まで、父を真似て新左衛門を、謀叛人よばわりなされるので、新左衛門が腹をたてて、お屋敷へ来なくなつた。光正様が迎への使いをだされても、姿を見せない。

それで光正様が、なおその上にも生真面目な新左衛門を、からかわれようとして、少年のことなれば、前後の思慮もなく、途方もない悪戯を、思いたたれた。土井大炊頭のにせ判を作つて、謀叛の廻し文をつくり、大炊頭からと云つて、新左衛門の屋敷へとどけさせた。

これが問題となつて、きびしく事実を追及したところ、光正様の悪戯だということがわかり、無事にすまなくなつた。忠広公は帰国して、留守中だつたが、こ

の報らせをうけると、在国五十日ばかりにしかならなところ、驚いてすぐまた出府してきた。

しかし、すでに手遅れで、幕府の処置はきまつております。加藤家は改易されて、忠広公は出羽の莊内、鶴岡に移され、光正様は飛騨へ流されました。光正様は御後悔のあまり、飛騨へおくられてゆく途中、駕籠の中で舌をかみきり、自殺されたとも、承つております。忠広公は今になお、莊内に御健在でいられますが、どのようなお氣持で、居られますことやら。改易の時のお年が、三十歳を一つ越えられたばかりでした」

主人の話に、耳を傾けていた客は、盃をほして主人にさし、

「なるほど、仔細はそうに、取留めなきこととござつたか。さるにても、高麗まで勇名をはせられた、名将清正公のお跡が二代と保たずに断滅とは、いかに徳川の天下とはいえ、惜みてもあまりあることで御座る」

「広い世間に、一人でもそう仰有つて下さる方があれば、手前達まで嬉しくなります、世の人々は、徳川方に、何事も迎合して、忠広公御父子を、暗愚とか、う

つけ者とか、口悪く申しますが、御父子にとつては幕府の処置が、さぞかし御無念に、思われたことでござりましょう。道中で舌をかみきられたという、光正様はもとより、池上の本門寺に、謹慎されていた忠広公も、加藤家改易を申渡されると、清正公相伝の片鎌槍をうち折つて、直ちに薙髪されたと申します。

忠広公は御器量は、父君に劣られたかも知れませんが、決して暗愚でも、うつけ者でもありません。荘内の配所にあつて、公の作られた詩に、

人間万事定不定

身は明星に似て西又東

三十一年一夢の如し

醒め来れば荘内破簾の中

これによつても、うつけ者ではない、お嗜みのほどが、分ろうかと思ひます。たしかに人の一生は、定まりあるよう定まりなく、行末のことは、誰にも測られませぬ。そう考えて、一身のことは、思いきりました。そこで一句、

稲妻の宿りをしばし大額

いかがで、御座りまするか、はははははは

「されば喧嘩に、火花を散らされている次第でござるな」

「まず、そんなところで、御座りましょう」

二人は話の間に、みるみる一升余の酒を、平げてしまつた。主人も強いが、客の武士も強い。

まだ、互の名乗合いもすまぬうち、はや旧知のように親しくなつてゐる。これも酒の一徳であろう。

「関ヶ原以来、徳川の手で潰されたり、滅知されたりした、大小名の数は二百二十余家。そのため家禄を失つた武士は、幾万幾十万にも、のぼるでござろう。この江戸市内ばかりでも、仕途をもとめて、浪居している者が、数知れずござるわ」

酔が少し、まわつてきたらしい武士は、盃をおいて長歎した。

「直参の武士共が、憎うなるのも無理はござらぬ」

「まことに主家を失い、扶持に離れた浪人の境遇ほど、みじめなもの御座りませぬな。手前もそれ故、武士をすてました」

主人は、話をつづけて、

「医者、易者、手習師匠、武具の細工人、または武術

の指南者などに、なつた者はまだしも、路傍の小屋に
すんで旅人に草鞋を売り、或いは窮して、盗賊の汚名
をきせられ、自害した者もござります。手前なども貧
窮のうちに、両親を見おくり、一人の娘を残して、妻に
先立たれました。かように遊侠、無頼の徒に、伍する
ようになりましたのも、いわば自暴のはてとでも、申
しましょうか。この世を我が物顔にふるまう、幕臣共
を相手に、斬死にできれば、本望と存じております」
「左様々々、その意気込みがなくては、あのようなお
働きは、なり申すまい。したが——」

客はそれとなく、主人の体を窺いながら、ゆつくり
と盃をほして、

「徳川の天下も、はや三代、すつかり、基礎が定まり
申した。幕臣相手の喧嘩は、損でござる。怪我のない
うち、お止めなされたがお徳ではござらぬかな」

亭主は相手の忠告を、素直に聞き流して、

「まつたく、おつしやる通り、無事をはかるに、越し
たことはありませんが、これは損徳より、手前の虫の
せいで、ござりましょう、ははははは」

「なるほど、虫なれば仕方がない。匹夫にも五分の魂、

と申せば、利害ではきめられぬこと。いや近頃、面白
い御仁に、お会い致しました。ははははは」

二人は一段と、親みをくわえたように、盃をとりか
わしながら

「申遅れましたが、手前は、船津弥左衛門というがさつ
者。勝手ながらこれを御縁に、今後昵懇を願います」
「拙者は、本郷弓町、中間町にすまいいたす、丸橋忠
弥盛澄。お見知りおき下され」

弥左衛門、丸橋と聞いて、眼をみはり

「やあ、御高名の丸橋先生で、いらつしやいました
か。これは、お見それ致しました」

亭主が改まるのを、忠弥は手で制して

「拙者も御同様、浪人の境涯にござる。以後は朋友と
して、お付き合い下さるよう」

「恐れいりました。当時府下に、宝蔵院流の槍術師範、
中村市右衛門殿をはじめ、旗本の侍にも岡田淡路守そ
の他、名譽の人々が、あまた居るようですが、先生は
その中でも、管槍の名人として、随一の評判がござり
ます。これは、よいお方に、お目にかかりましたな」
船津のみるところ、丸橋は彼より数歳年長で、四十